

貯法：室温保存  
有効期間：3年

持続性ARB/利尿薬合剤

	配合錠LD	配合錠HD
承認番号	22500AMX01228000	22500AMX01825000
販売開始	2006年12月	2014年4月

# 日本薬局方 ロサルタンカリウム・ ヒドロクロロチアジド錠 プレミネント®配合錠LD プレミネント®配合錠HD

処方箋医薬品：注意—医師等の処方箋に  
より使用すること

PREMINENT® Tablets LD, HD

ORGANON

## 2. 禁忌(次の患者には投与しないこと)







- 2.1 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者
- 2.2 チアジド系薬剤又はその類似化合物(例えばクロロタリドン等のスルホンアミド誘導体)に対する過敏症の既往歴のある患者
- 2.3 妊婦又は妊娠している可能性のある女性 [9.5 参照]
- 2.4 重篤な肝機能障害のある患者 [9.3.1 参照]
- 2.5 無尿の患者又は透析患者 [9.2.1 参照]
- 2.6 急性腎障害の患者 [9.2.2 参照]
- 2.7 体液中のナトリウム・カリウムが明らかに減少している患者 [低ナトリウム血症、低カリウム血症等の電解質失調を悪化させるおそれがある。] [9.1.2、11.1.7、11.1.15 参照]
- 2.8 アリスキレンを投与中の糖尿病患者(ただし、他の降圧治療を行ってもなお血圧のコントロールが著しく不良の患者を除く) [10.1 参照]
- 2.9 デスマプレシン酢酸塩水和物(男性における夜間多尿による夜間頻尿)を投与中の患者 [10.1 参照]

## 3. 組成・性状

### 3.1 組成

販売名	プレミネント®配合錠LD	プレミネント®配合錠HD
有効成分	日本薬局方 ロサルタンカリウム/ 日本薬局方 ヒドロクロロチアジド	
分量	50mg/12.5mg	100mg/12.5mg
添加剤	結晶セルロース、乳糖水和物、部分アルファ化デンプン、ステアリン酸マグネシウム、ヒプロメロース、ヒドロキシプロピルセルロース、酸化チタン、カルナバロウ	

### 3.2 製剤の性状

販売名	プレミネント®配合錠LD	プレミネント®配合錠HD
剤形・色調	円形・フィルムコーティング錠・白色	楕円形・フィルムコーティング錠・白色
外形	表面  直径：8.9mm	表面  長径：13.5mm 短径：7.7mm
	裏面 	裏面 
	側面  厚さ：4.1mm	側面  厚さ：4.8mm
識別コード	MSD717	745

## 4. 効能又は効果

高血圧症

## 5. 効能又は効果に関連する注意

過度な血圧低下のおそれ等があり、本剤を高血圧治療の第一選択薬としないこと。

## 6. 用法及び用量

成人には1日1回1錠(ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジドとして50mg/12.5mg又は100mg/12.5mg)を経口投与する。本剤は高血圧治療の第一選択薬として用いない。

## 7. 用法及び用量に関連する注意

原則として、ロサルタンカリウム50mgで効果不十分な場合にロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジドとして50mg/12.5mgの投与を、ロサルタンカリウム100mg又はロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジドとして50mg/12.5mgで効果不十分な場合にロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジドとして100mg/12.5mgの投与を検討すること。[8.1 参照]

## 8. 重要な基本的注意

- 8.1 本剤はロサルタンカリウム50mgあるいは100mgとヒドロクロロチアジド12.5mgの配合剤であり、ロサルタンカリウムとヒドロクロロチアジド双方の副作用が発現するおそれがあり、適切に本剤の使用を検討すること。[7. 参照]
- 8.2 一過性の血圧低下(ショック症状、意識消失、呼吸困難等を伴う)を起こすおそれがあるので、本剤投与中は定期的(投与開始時：2週間ごと、安定後：月1回程度)に血圧のモニタリングを実施すること。
- 8.3 本剤の成分であるヒドロクロロチアジドは低カリウム血症を起こすことが知られている。ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジドとして50mg/12.5mgが投与された国内臨床試験において、血清カリウム値は低下傾向を示し、また低カリウム血症の発現頻度は高カリウム血症よりも高かった。したがって、低カリウム血症の発現がより懸念されるので、血清カリウム値のモニタリングを定期的に実施し、観察を十分に行うこと。[9.1.2、11.1.7 参照]
- 8.4 本剤の成分であるヒドロクロロチアジドは高尿酸血症を発現させるおそれがあるので、本剤投与中は定期的に血清尿酸値のモニタリングを実施し、観察を十分に行うこと。[9.1.8 参照]
- 8.5 本剤の成分であるヒドロクロロチアジドは血糖値上昇若しくは糖尿病顕性化のおそれがあるので、観察を十分に行うこと。[9.1.8 参照]
- 8.6 本剤の成分であるヒドロクロロチアジドは重篤な血液障害を発現させるおそれがあるので、定期的に検査を実施するなど観察を十分に行うこと。[11.1.10 参照]
- 8.7 降圧作用に基づくめまい、ふらつきがあらわれることがあるので、高所作業、自動車の運転等危険を伴う機械を操作する際には注意させること。
- 8.8 手術前24時間は投与しないことが望ましい。アンジオテンシンⅡ受容体拮抗剤投与中の患者は、麻酔及び手術中にレニン・アンジオテンシン系の抑制作用による高度な血圧低下を起こすおそれがある。
- 8.9 本剤の成分を含むアンジオテンシンⅡ受容体拮抗剤投与中にまれに肝炎等の重篤な肝障害があらわれたとの報告がある。肝機能検査を実施するなど、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
- 8.10 本剤の投与により利尿効果が急激にあらわれることがあるので、電解質失調、脱水に十分注意すること。
- 8.11 夜間の休息が特に必要な患者には、夜間の排尿を避けるため、午前中に投与することが望ましい。

\*8.12 本剤の成分であるヒドロクロロチアジドは急性近視、閉塞隅角緑内障、脈絡膜滲出を発現させるおそれがあるので、急激な視力の低下や眼痛等の異常が認められた場合には、直ちに眼科医の診察を受けるよう、患者に指導すること。[11.1.16 参照]

## 9. 特定の背景を有する患者に関する注意

### 9.1 合併症・既往歴等のある患者

#### 9.1.1 両側性腎動脈狭窄のある患者又は片腎で腎動脈狭窄のある患者

治療上やむを得ないと判断される場合を除き、使用は避けること。腎血流量の減少や糸球体ろ過圧の低下により急速に腎機能を悪化させるおそれがある。

#### 9.1.2 血清カリウム値異常の患者

低カリウム血症又は高カリウム血症を起こすおそれがある。[2.7、8.3、9.1.3、11.1.7 参照]

#### 9.1.3 高カリウム血症の患者

治療上やむを得ないと判断される場合を除き、使用は避けること。本剤の成分であるロサルタンカリウムは、高カリウム血症を増悪させるおそれがある。また、腎機能障害、コントロール不良の糖尿病等により血清カリウム値が高くなりやすい患者では、高カリウム血症が発現するおそれがあるので、血清カリウム値のモニタリングを定期的に行うこと。[9.1.2、11.1.7 参照]

#### 9.1.4 脳血管障害のある患者

過度の降圧が脳血流不全を惹起し、病態を悪化させるおそれがある。

#### 9.1.5 体液量が減少している患者（水分摂取の不十分な患者、過度の発汗をしている患者）

一過性の血圧低下を起こすおそれがある。[11.1.5 参照]

#### 9.1.6 減塩療法中の患者

低ナトリウム血症を起こすおそれがある。特に、重度な減塩療法中の患者では、一過性の血圧低下を起こすおそれがある。[11.1.5、11.1.15 参照]

#### 9.1.7 重篤な冠動脈硬化症又は脳動脈硬化症のある患者

急激な利尿があらわれた場合、急速な血漿量減少、血液濃縮を来し、血栓塞栓症を誘発するおそれがある。

#### 9.1.8 本人又は両親、兄弟に痛風、糖尿病のある患者、及び高尿酸血症のある患者

高尿酸血症、高血糖症を来し、痛風、糖尿病の悪化や顕性化のおそれがある。[8.4、8.5 参照]

#### 9.1.9 下痢、嘔吐のある患者

電解質失調があらわれるおそれがある。

#### 9.1.10 高カルシウム血症、副甲状腺機能亢進症のある患者

血清カルシウムを上昇させるおそれがある。

#### 9.1.11 交感神経切除後の患者

本剤の降圧作用が増強されるおそれがある。

### 9.2 腎機能障害患者

#### 9.2.1 無尿の患者又は透析患者

投与しないこと。[2.5 参照]

#### 9.2.2 急性腎障害の患者

投与しないこと。腎機能を更に悪化させるおそれがある。[2.6 参照]

#### 9.2.3 腎機能障害患者（血清クレアチニン値 2.0mg/dL超）

治療上やむを得ないと判断される場合を除き、使用は避けること。ヒドロクロロチアジドにより腎血流量が低下し、ロサルタンカリウムにより腎機能障害が悪化するおそれがある。

#### 9.2.4 腎機能低下患者（血清クレアチニン値 1.5～2.0mg/dL）

本剤投与中は定期的に血清クレアチニン値及び血清尿酸値のモニタリングを実施し、観察を十分に行うこと。血清クレアチニン値上昇及び血清尿酸値上昇のおそれがある。

### 9.3 肝機能障害患者

#### 9.3.1 重篤な肝機能障害のある患者

投与しないこと。[2.4、9.3.2 参照]

#### 9.3.2 肝機能障害又はその既往のある患者（ただし、重篤な肝機能障害のある患者を除く）

外国において、軽・中等度のアルコール性肝硬変患者にロサルタンカリウム50mgを単回経口投与すると、健康成人と比較してロサルタンの消失速度が遅延し、ロサルタン及びカルボン酸体の血漿中濃度がそれぞれ約5倍及び約2倍に上昇することが報告されている。また、ヒドロクロロチアジドは肝性昏睡を誘発するおそれがある。[9.3.1 参照]

## 9.4 生殖能を有する者

### 9.4.1 妊娠する可能性のある女性

妊娠していることが把握されずアンジオテンシン変換酵素阻害剤又はアンジオテンシンII受容体拮抗剤を使用し、胎児・新生児への影響（腎不全、頭蓋・肺・腎の形成不全、死亡等）が認められた例が報告されている<sup>1)、2)</sup>。

本剤の投与に先立ち、代替薬の有無等も考慮して本剤投与の必要性を慎重に検討し、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。また、投与が必要な場合には次の注意事項に留意すること。[9.5 参照]

- 1) 本剤投与開始前に妊娠していないことを確認すること。本剤投与中も、妊娠していないことを定期的に確認すること。投与中に妊娠が判明した場合には、直ちに投与を中止すること。
- 2) 次の事項について、本剤投与開始時に患者に説明すること。また、投与中も必要に応じ説明すること。
  - ・妊娠中に本剤を使用した場合、胎児・新生児に影響を及ぼすリスクがあること。
  - ・妊娠が判明した又は疑われる場合は、速やかに担当医に相談すること。
  - ・妊娠を計画する場合は、担当医に相談すること。

### 9.5 妊婦

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には投与しないこと。投与中に妊娠が判明した場合には、直ちに投与を中止すること。妊娠中期及び末期にアンジオテンシン変換酵素阻害剤又はアンジオテンシンII受容体拮抗剤を投与された患者で羊水過少症、胎児・新生児の死亡、新生児の低血圧、腎不全、多臓器不全、頭蓋の形成不全及び羊水過少症によると推測される四肢の拘縮、頭蓋顔面の奇形、肺の低形成等があらわれたとの報告がある。なお、チアジド系薬剤では新生児又は乳児に高ビリルビン血症、血小板減少症等を起こすことがある。また、利尿効果に基づく血漿量減少、血液濃縮、子宮・胎盤血流量減少があらわれることがある。[2.3、9.4.1 参照]

### 9.6 授乳婦

授乳しないことが望ましい。ラットの産後期及び授乳期にロサルタンカリウム1mg/kg/day/ヒドロクロロチアジド0.25mg/kg/day～ロサルタンカリウム50mg/kg/day/ヒドロクロロチアジド12.5mg/kg/dayを投与した試験において、ロサルタンカリウム50mg/kg/day/ヒドロクロロチアジド12.5mg/kg/day群で産児体重の減少及び腎の病理組織学的変化がみられた。また、ロサルタン、カルボン酸体及びヒドロクロロチアジドの乳汁移行性も確認された。本試験の産児に対する無毒性量はロサルタンカリウム10mg/kg/day/ヒドロクロロチアジド2.5mg/kg/dayであった。ヒドロクロロチアジドは、ヒト母乳中への移行が報告されている。

### 9.7 小児等

小児等を対象とした臨床試験は実施していない。乳児は電解質バランスがくずれやすい。

### 9.8 高齢者

9.8.1 一般に生理機能が低下している。

9.8.2 一般に過度の降圧は好ましくないとされている。脳梗塞等が起こるおそれがある。

9.8.3 高齢者でのロサルタンカリウム単独投与における薬物動態試験で、ロサルタン及びカルボン酸体の血漿中濃度が非高齢者に比べて高かった（非高齢者に比較してロサルタン及びカルボン酸体の血漿中濃度がそれぞれ約2倍及び約1.3倍に上昇）。

9.8.4 急激な利尿は血漿量の減少を来し、脱水、低血圧等による立ちくらみ、めまい、失神等を起こすことがある。

9.8.5 特に心疾患等で浮腫のある高齢者では急激な利尿は急速な血漿量の減少と血液濃縮を来し、脳梗塞等の血栓塞栓症を誘発するおそれがある。

9.8.6 低ナトリウム血症、低カリウム血症があらわれやすい。

## 10. 相互作用

本剤の成分であるロサルタンカリウムは、薬物代謝酵素チトクロームP450 2C9 (CYP2C9) 及び3A4 (CYP3A4) により活性代謝物であるカルボン酸体に代謝される。なお、本剤の成分であるヒドロクロロチアジドは、ほとんど代謝されることなく尿中に排泄される。[16.4 参照]



10.1 併用禁忌 (併用しないこと)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
アリスキレン ラジレス (糖尿病患者に使用する 場合。ただし、他の 降圧治療を行って もなお血圧のコント ロールが著しく不良 の患者を除く。) [2.8 参照]	非致死性脳卒中、腎 機能障害、高カリウ ム血症及び低血圧の リスク増加が報告さ れている。	レニン・アンジオテ ンシン系阻害作用が 増強される可能性が ある。
デスマプレシン酢酸 塩水和物 ミニリンメルト (男性における夜間多 尿による夜間頻尿) [2.9 参照]	低ナトリウム血症が 発現するおそれがあ る。	いずれも低ナトリウ ム血症が発現するお それがある。

10.2 併用注意 (併用に注意すること)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
カリウム保持性利尿 剤： スピロノラクトン トリウムテレン等 カリウム補給剤： 塩化カリウム トリメトプリム含有 製剤： スルファメトキサ ゾール・トリメト プリム	血清カリウム値が上 昇するおそれがある。	本剤の成分であるロ サルタンカリウムと の併用によりカリウ ム貯留作用が増強す るおそれがある。腎 機能障害のある患者 には特に注意するこ と。
利尿降圧剤： フロセミド トリクロルメチア ジド等 [11.1.5 参照]	一過性の血圧低下を 起こすおそれがある。	利尿降圧剤で治療 を受けている患者に はレニン活性が亢進 している患者が多く 、本剤が奏効しやすい。
アリスキレン	腎機能障害、高カリ ウム血症及び低血 圧を起こすおそれ がある。eGFRが 60mL/min/1.73m <sup>2</sup> 未満の腎機能障害 のある患者へのア リスキレンとの併 用については、治 療上やむを得ない と判断される場合 を除き避けること。	レニン・アンジオテ ンシン系阻害作用が 増強される可能性 がある。
アンジオテンシン変 換酵素阻害剤	腎機能障害、高カリ ウム血症及び低血 圧を起こすおそれ がある。	
バルビツール酸誘導 体	起立性低血圧が増強 されることがある。	これらの薬剤の中 枢抑制作用と本剤 の成分であるヒド ロクロロチアジド の降圧作用による。
あへんアルカロイド 系麻薬		本剤の成分であるヒ ドロクロロチアジ ドとあへんアルカ ロイドの大量投与 で血圧下降があら われることが報告 されている。
アルコール		本剤の成分であるヒ ドロクロロチアジ ドと血管拡張作用 を有するアルコール との併用により降 圧作用が増強され る可能性がある。
昇圧アミン： ノルアドレナリン アドレナリン	昇圧アミンの作用を 減弱することがあ る。手術前の患者 に使用する場合、 本剤の一時休薬等 の処置を講ずるこ と。	本剤の成分であるヒ ドロクロロチアジ ドは昇圧アミンに 対する血管壁の反 応性を低下させる ことが報告されて いる。

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
ツボクラリン及びそ の類似作用物質： ツボクラリン塩化 物塩酸塩水和物	ツボクラリン及びそ の類似作用物質の 麻痺作用を増強す ることがある。手 術前の患者に使用 する場合、本剤の 一時休薬等の処置 を講ずること。	本剤の成分であるヒ ドロクロロチアジ ドによる血清カリ ウム値の低下によ り、これらの薬剤 の神経・筋遮断作 用を増強すると考 えられている。
降圧作用を有する他 の薬剤： β-遮断剤 ニトログリセリン 等	降圧作用を増強す るおそれがある。降 圧剤の用量調節等 に注意すること。	作用機序の異なる 降圧作用により互 いに協力的に作用 する。
ジギタリス剤： ジゴキシン	ジギタリスの心臓 に対する作用を増 強し、不整脈等を 起こすことがある。 血清カリウム値に 十分注意すること。	本剤の成分であるヒ ドロクロロチアジ ドによる血清カリ ウム値の低下によ り多量のジギタリ スが心筋Na-K ATPaseに結合し 、心収縮力増強と 不整脈が起こる。 マグネシウム低下 も同様の作用を示 す。
乳酸ナトリウム	チアジド系薬剤によ る代謝性アルカロー シス、低カリウム血 症を増強することが ある。	本剤の成分であるヒ ドロクロロチアジ ドのカリウム排泄 作用により低カリ ウム血症や代謝性 アルカローシスが 引き起こされることが ある。アルカリ化 剤である乳酸ナ トリウムの併用は この状態を更に 増強させる。
リチウム： 炭酸リチウム	リチウム中毒が報 告されている。血 中リチウム濃度に 注意すること。  振戦、消化器愁訴 等、リチウム中毒 を増強することが ある。血清リチ ウム濃度に注意 すること。	本剤の成分である ロサルタンカリウ ムの併用により、 リチウムの蓄積 が起こると考え られている。  本剤の成分である ヒドロクロロチ アジドは腎にお けるリチウムの 再吸収を促進し 、リチウムの血 中濃度を上昇さ せる。
副腎皮質ホルモン 剤 ACTH	低カリウム血症が 発現することがあ る。	本剤の成分である ヒドロクロロチ アジド及び副腎 皮質ホルモン剤 、ACTHともカ リウム排泄作用 を持つ。
グリチルリチン製 剤	血清カリウム値の 低下があらわれ やすくなる。	グリチルリチン製 剤は低カリウム 血症を主徴とし た偽アルドステ ロン症を引き起 こすことがある。 したがって本剤 の成分であるヒ ドロクロロチア ジドとグリチル リチン製剤の併 用により低カリ ウム血症を増強 する可能性がある。
糖尿病用剤： SU剤 インスリン 速効型インスリン 分泌促進薬	糖尿病用剤の作用 を著しく減弱す ることがある。	機序は明確では ないが、本剤の 成分であるヒド ロクロロチアジ ドによるカリウ ム喪失により膵 臓のβ細胞の インスリン放出 が低下すると考 えられている。

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
コレステラミン	チアジド系薬剤の作用が減弱することがある。	コレステラミンの吸着作用により本剤の成分であるヒドロクロロチアジドの吸収が阻害されることがある。
非ステロイド性消炎鎮痛剤： インドメタシン等	降圧作用が減弱されるおそれがある。	プロスタグランジンの合成阻害作用により、本剤の降圧作用を減弱させる可能性がある。
	腎機能が悪化している患者では、さらに腎機能が悪化するおそれがある。	プロスタグランジンの合成阻害作用により、腎血流量が低下するためと考えられる。
	チアジド系薬剤の作用が減弱することがある。	非ステロイド性消炎鎮痛剤のプロスタグランジン合成酵素阻害作用により、腎内プロスタグランジンが減少し、水・ナトリウムの体内貯留が生じて本剤の成分であるヒドロクロロチアジドの作用と拮抗する。
グレープフルーツジュース	降圧作用が減弱されるおそれがある。本剤の投与中はグレープフルーツジュースの摂取は避けること。	グレープフルーツジュースに含まれる成分のCYP3A4阻害作用により本剤の有効成分であるロサルタンカリウムの活性代謝物の血中濃度が低下するため、本剤の降圧作用が減弱されるおそれがある。

## 11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

### 11.1 重大な副作用

#### 11.1.1 アナフィラキシー（頻度不明）

不快感、口内異常感、発汗、蕁麻疹、呼吸困難、全身潮紅、浮腫等があらわれることがある。

#### \*\* 11.1.2 血管性浮腫（頻度不明）

顔面、口唇、咽頭、舌等の腫脹があらわれることがある。また、腹痛、嘔気、嘔吐、下痢等を伴う腸管血管性浮腫があらわれることがある。

#### 11.1.3 急性肝炎又は劇症肝炎（いずれも頻度不明）

#### 11.1.4 急性腎障害（頻度不明）

#### 11.1.5 ショック、失神、意識消失（いずれも頻度不明）

冷感、嘔吐、意識消失等があらわれた場合には、直ちに適切な処置を行うこと。[9.1.5、9.1.6、10.2 参照]

#### 11.1.6 横紋筋融解症（頻度不明）

筋肉痛、脱力感、CK上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇を特徴とする横紋筋融解症があらわれた場合には、投与を中止し、適切な処置を行うこと。また、横紋筋融解症による急性腎障害の発症に注意すること。

#### 11.1.7 低カリウム血症、高カリウム血症（いずれも頻度不明）

血清カリウム値の異常変動に伴い、倦怠感、脱力感、不整脈等があらわれることがある。[2.7、8.3、9.1.2、9.1.3 参照]

#### 11.1.8 不整脈（頻度不明）

心室性期外収縮、心房細動等の不整脈があらわれることがある。

#### 11.1.9 汎血球減少、白血球減少、血小板減少（いずれも頻度不明）

#### 11.1.10 再生不良性貧血、溶血性貧血（いずれも頻度不明）

[8.6 参照]

#### 11.1.11 壊死性血管炎（頻度不明）

#### 11.1.12 間質性肺炎、肺水腫、急性呼吸窮迫症候群（いずれも頻度不明）

間質性肺炎、肺水腫があらわれることがある。また、ヒドロクロロチアジド服用後、数分から数時間以内に急性呼吸窮迫症候群が発現したとの報告がある<sup>3) - 6)</sup>。

#### 11.1.13 全身性エリテマトーデスの悪化（頻度不明）

#### 11.1.14 低血糖（頻度不明）

脱力感、空腹感、冷汗、手の震え、集中力低下、痙攣、意識障害等があらわれた場合には、投与を中止し、適切な処置を行うこと。糖尿病治療中の患者であらわれやすい。

#### 11.1.15 低ナトリウム血症（頻度不明）

倦怠感、食欲不振、嘔気、嘔吐、痙攣、意識障害等を伴う低ナトリウム血症があらわれることがある。[2.7、9.1.6 参照]

#### \* 11.1.16 急性近視、閉塞隅角緑内障、脈絡膜滲出（いずれも頻度不明）

急性近視（霧視、視力低下等を含む）、閉塞隅角緑内障、脈絡膜滲出があらわれることがある。[8.12 参照]

## 11.2 その他の副作用

	0.1～5%未満 <sup>注)</sup>	頻度不明
精神神経系	めまい、浮遊感、眠気、頭痛	耳鳴、不眠、知覚異常
循環器系	低血圧、起立性低血圧、動悸	調律障害（頻脈等）、胸痛
消化器	嘔吐・嘔気	口内炎、下痢、口角炎、胃不快感、胃潰瘍、腹部仙痛、痔炎、唾液腺炎、便秘、食欲不振、腹部不快感、口渇
肝臓	黄疸、肝機能障害（AST上昇、ALT上昇、LDH上昇等）	
腎臓	BUN上昇、クレアチニン上昇	
皮膚	発疹、蕁麻疹	多形紅斑、光線過敏、紅皮症、紅斑、そう痒、顔面潮紅、皮膚エリテマトーデス
血液	貧血、赤血球数増加、赤血球数減少、ヘマトクリット低下、ヘマトクリット上昇、ヘモグロビン増加、白血球数増加、リンパ球数増加	好酸球数増加、好中球百分率増加、リンパ球数減少
その他	倦怠感、CK上昇、高尿酸血症、高血糖症、頸部異和感、多汗、頻尿、CRP増加、尿中ブドウ糖陽性、尿中赤血球陽性、尿中白血球陽性、尿中蛋白陽性、BNP増加	発熱、味覚障害、しびれ感、眼症状（かすみ、異和感等）、黄視症、ほてり、浮腫、筋肉痛、咳嗽、低マグネシウム血症、低クロール性アルカローシス、血清カルシウム増加、インポテンス、高カルシウム血症を伴う副甲状腺障害、筋痙攣、関節痛、鼻閉、紫斑、呼吸困難、血清脂質増加、女性化乳房

注) ロサルタンカリウム／ヒドロクロロチアジドとして100mg/12.5mg、50mg/12.5mg、50mg/6.25mg、25mg/6.25mgを投与した臨床試験を含む。

## 12. 臨床検査結果に及ぼす影響

甲状腺障害のない患者の血清PBIを低下させることがある。

## 14. 適用上の注意

### 14.1 薬剤交付時の注意

PTP包装の薬剤はPTPシートから取り出して服用するよう指導すること。PTPシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔をおこして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することがある。

## 15. その他の注意

### 15.1 臨床使用に基づく情報

海外で実施された疫学研究において、ヒドロクロロチアジドを投与された患者で、基底細胞癌及び有棘細胞癌のリスクが増加することが報告されている<sup>7)、8)</sup>。

## 16. 薬物動態

### 16.1 血中濃度

#### 16.1.1 単回投与

- (1) 健康成人にロサルタンカリウム／ヒドロクロロチアジド 50mg/12.5mgを単回経口投与すると、ロサルタン及びカルボン酸体は、それぞれ投与後1.4及び3.7時間に最高血漿中濃度 ( $C_{max}$ ) に達し、消失半減期 ( $t_{1/2}$ ) 1.7及び5.8時間で消失した。ヒドロクロロチアジドの血漿中濃度は、投与後2.8時間で  $C_{max}$  に達し、 $t_{1/2}$  は7.9時間であった (図1、表)。

図1 ロサルタンカリウム／ヒドロクロロチアジド50mg/12.5mgを健康成人に単回経口投与した後のロサルタン、カルボン酸体及びヒドロクロロチアジドの平均血漿中濃度 (n=11)  
ロサルタン○、カルボン酸体△、ヒドロクロロチアジド□

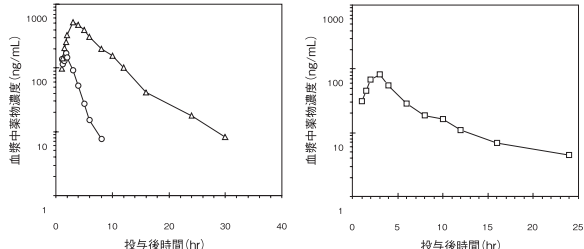


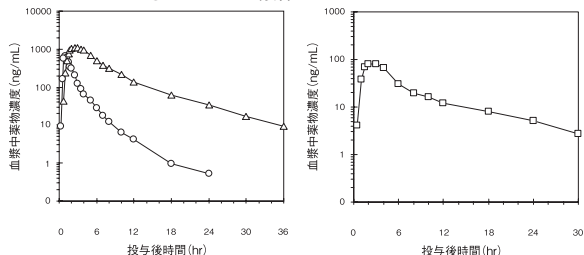
表 健康成人におけるロサルタンカリウム／ヒドロクロロチアジド 50mg/12.5mgを単回経口投与後の薬物動態パラメータ

	ロサルタンカリウム50 mg/ ヒドロクロロチアジド12.5 mg		
	ロサルタン	カルボン酸体	ヒドロクロロチアジド
$C_{max}$ (ng/mL)	291.0±96.9	592.9±137.4	95.9±20.9
$T_{max}$ (hr)	1.4±0.8	3.7±1.2	2.8±0.9
$AUC_{0-\infty}$ (ng·hr/mL)	504.8±180.2	3674.1±680.2	516.2±89.8
$t_{1/2}$ (hr)	1.7±0.6	5.8±1.1	7.9±1.2

n=11、平均±標準偏差 ( $C_{max}$ 、 $AUC$ ：幾何平均、 $T_{max}$ ：算術平均、 $t_{1/2}$ ：調和平均)

- (2) 健康成人にロサルタンカリウム／ヒドロクロロチアジド 100mg/12.5mgを単回経口投与すると、ロサルタン及びカルボン酸体は、それぞれ投与後1.3及び2.5時間に  $C_{max}$  に達し、 $t_{1/2}$  はそれぞれ2.5及び6.6時間であった。ヒドロクロロチアジドの血漿中濃度は、投与後2.2時間で  $C_{max}$  に達し、 $t_{1/2}$  は8.1時間であった (図2)。

図2 ロサルタンカリウム／ヒドロクロロチアジド100mg/12.5mgを健康成人に単回経口投与した後のロサルタン、カルボン酸体及びヒドロクロロチアジドの平均血漿中濃度 (n=12)  
ロサルタン○、カルボン酸体△、ヒドロクロロチアジド□



#### 16.1.2 反復投与

軽症及び中等症の本態性高血圧症患者にロサルタンカリウム／ヒドロクロロチアジド50mg/12.5mgを1日1回14日間反復経口投与した時、血漿中ロサルタン、カルボン酸体及びヒドロクロロチアジドのいずれにも蓄積性は認められなかった。

### 16.2 吸収

#### 16.2.1 食事の影響

- (1) 健康成人にロサルタンカリウム／ヒドロクロロチアジド 50mg/12.5mgを食後投与すると、空腹時投与に比べてロサルタン、カルボン酸体及びヒドロクロロチアジドのいずれも最高血漿中濃度到達時間 ( $T_{max}$ ) が遅延 (0.7~1.7時間) し、ロサルタンの血漿中濃度-時間曲線下面積 ( $AUC$ ) は差がなかったものの、カルボン酸体及びヒドロクロロチアジドの  $AUC$  がそれぞれ17%及び22%低下したが、臨床問題とならない程度であった。
- (2) 健康成人にロサルタンカリウム／ヒドロクロロチアジド 100mg/12.5mgを食後単回経口投与した場合、空腹時投与に比べてロサルタン、カルボン酸体及びヒドロクロロチアジドのいずれも  $T_{max}$  が遅延 (2.0~2.8時間) し、ロサルタン、カルボン酸体及びヒドロクロロチアジドの  $AUC$  がそれぞれ22%、23%及び11%低下したが、臨床問題とならない程度であった。

### 16.3 分布

ヒトにおけるロサルタン及びカルボン酸体の血漿蛋白結合率は、いずれも99%以上であった。

ヒドロクロロチアジドのヒト血清蛋白結合率は22%であった。

外国人におけるロサルタンの分布容積は34 Lであった。

### 16.4 代謝

ヒトにおいて、ロサルタンは主としてカルボン酸体へ代謝され、この代謝には、主としてCYP2C9が関与した。

ヒトにおいてヒドロクロロチアジドはほとんど代謝されなかった。[10. 参照]

### 16.5 排泄

健康成人にロサルタンカリウム／ヒドロクロロチアジド 50mg/12.5mgを単回経口投与後48時間までに、ロサルタン、カルボン酸体及びヒドロクロロチアジドが、尿中にそれぞれ投与量の3.7%、7.7%及び66.6%排泄された。

### 16.6 特定の背景を有する患者

#### 16.6.1 腎機能障害患者

腎機能障害を伴う高血圧症患者 (血清クレアチニン値1.5~2.5mg/dL) にロサルタンカリウム／ヒドロクロロチアジド 50mg/12.5mgを1日1回7日間反復経口投与した時のロサルタン及びカルボン酸体の  $C_{max}$  は、腎機能正常患者に比べ1.2倍高く、 $AUC_{0-24hr}$  は1.5~1.7倍高かった。ヒドロクロロチアジドの  $C_{max}$  及び  $AUC_{0-24hr}$  は、それぞれ腎機能正常患者の1.4倍及び2.2倍、腎クリアランスは27%であった。

#### 16.6.2 高齢者

ロサルタンカリウム／ヒドロクロロチアジド50mg/12.5mgを1日1回7日間反復経口投与後のロサルタン及びカルボン酸体の血漿中濃度は、非高齢者と差はなく、ヒドロクロロチアジドの吸収も非高齢者と差がなかった (外国人データ)。

### 16.7 薬物相互作用

健康成人にロサルタンカリウム／ヒドロクロロチアジド 50mg/12.5mgを単回経口投与した後のロサルタン、カルボン酸体及びヒドロクロロチアジドの血漿中濃度は、各単剤投与後と差がなく、ロサルタンとヒドロクロロチアジドとの薬物動態的な相互作用は認められなかった。

海外において、ロサルタンとシメチジン、フェノバルビタール、ワルファリン、ジゴキシン、ケトコナゾール及びエリスロマイシンの相互作用について検討したが、いずれも臨床問題となる薬物動態的な相互作用は認められなかった。ロサルタンとリファンピシン (代謝酵素誘導剤) との併用により、ロサルタン及びカルボン酸体の消失が速くなり、それらの  $AUC$  は減少した。また、ロサルタンとフルコナゾール (CYP2C9の阻害剤) の併用により、カルボン酸体の  $C_{max}$  及び  $AUC$  が減少したが、ロサルタンの  $AUC$  は増加した。

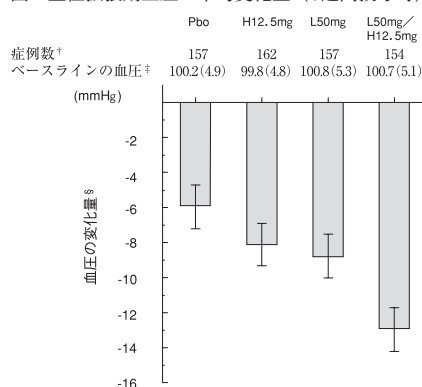
## 17. 臨床成績

### 17.1 有効性及び安全性に関する試験

#### 17.1.1 第Ⅲ相二重盲検比較試験

日本人を対象とした二重盲検比較試験において、ロサルタンカリウム／ヒドロクロロチアジド50mg/12.5mgはロサルタンカリウム50mg投与よりも有意に優れた降圧効果が認められた。降圧効果判定採用154例のうち有効 (拡張期血圧が90mmHg未満に又は10mmHg以上低下した症例) と判定された症例は112例 (73%) であった。なお、8週間時における拡張期血圧の平均変化量は下図のとおりであった。

図 坐位拡張期血圧の平均変化量 (8週間投与時)



Pbo=プラセボ、L=ロサルタンカリウム、H=ヒドロクロロチアジド  
†主要評価項目のFAS解析対象例、‡平均値 (標準偏差)、§最小二乗平均値 (標準誤差)

ロサルタンカリウム／ヒドロクロロチアジド50mg/12.5mgが投与された患者で自覚症状の副作用が報告されたのは155例中14例 (9.0%) であり、主な副作用は浮動性めまい5例 (3.2%)、悪心2例 (1.3%) であった。また、臨床検査値の副作用が報告されたのは155例中22例 (14.2%) であり、主な臨床検査値の副作用は、尿酸増加8例 (5.3%)、ALT増加、CK増加各3例 (2.0%)、赤血球数減少、ヘマトクリット減少、ヘモグロビン減少、AST増加、BUN増加各2例 (1.3%) であった。また、ロサルタンカリウム／ヒドロクロロチアジド50mg/12.5mgの副作用発現率は、プラセボと同程度であった。



### 17.1.2 国内Ⅲ相長期投与試験

日本人を対象に長期の安全性を検討したⅢ相試験において、ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジド50mg/12.5mgが投与された患者で自覚症状の副作用が報告されたのは200例中28例(14.0%)であり、主な副作用は頻尿6例(3.0%)、浮動性めまい4例(2.0%)、右脚ブロック、動悸、異常感、蕁麻疹各2例(1.0%)であった。また、臨床検査値の副作用が報告されたのは200例中26例(13.0%)であり、主な臨床検査値の副作用は尿酸増加6例(3.0%)、ALT増加5例(2.5%)、AST増加、カリウム減少各4例(2.0%)、赤血球数減少、ヘマトクリット減少各3例(1.5%)、白血球数増加、ヘモグロビン減少、LDH増加、CK増加、尿中赤血球陽性各2例(1.0%)であった。

### 17.1.3 国内Ⅲ相二重盲検比較試験

ロサルタンカリウム100 mgを服用後に血圧コントロールが不十分であった日本人本態性高血圧症患者を対象としたⅢ相二重盲検試験において、ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジド100mg/12.5mgはロサルタンカリウム100mg投与よりも、投与8週時の平均トラフ坐位収縮期及び拡張期血圧共に、有意に優れた降圧効果を示した(P<0.001)。投与8週時における平均トラフ坐位血圧のベースラインからの変化量を表1に示す<sup>9)</sup>。

表1 ロサルタンカリウム100mgで効果不十分な高血圧症患者を対象とした試験での平均トラフ坐位血圧のベースラインからの変化量<sup>†</sup>(mmHg)

		ベースラインの血圧 <sup>‡</sup>	投与8週時の変化量 <sup>†</sup>
ロサルタンカリウム100mg (N=170) <sup>§</sup>	収縮期	155.0 (10.4)	-5.4 (1.0)
	拡張期	97.7 (5.7)	-3.6 (0.6)
ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジド100mg/12.5mg (N=166) <sup>§</sup>	収縮期	155.4 (11.0)	-14.5 (1.0)
	拡張期	97.1 (5.3)	-8.7 (0.6)

<sup>†</sup> 最小二乗平均値(標準誤差)、<sup>‡</sup> 平均値(標準偏差)、<sup>§</sup> 主要評価項目のFAS解析対象例

ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジド100mg/12.5mgが投与された患者で副作用が報告されたのは166例中16例(9.6%)であり、主な副作用は血中尿酸増加4例(2.4%)、高尿酸血症、浮動性めまい、低血圧、ALT増加、AST増加、血中ビリルビン増加各2例(1.2%)であった<sup>9)</sup>。

### 17.1.4 国内Ⅲ相二重盲検比較試験及び長期投与試験

ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジド50mg/12.5mgを8週間服用後に血圧コントロールが不十分であった日本人本態性高血圧症患者を対象に長期安全性を評価したⅢ相試験の二重盲検期(8週間)において、ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジド100mg/12.5mgはロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジド50mg/12.5mgと比べて、投与8週時の平均トラフ坐位拡張期血圧では同程度の降圧効果を示し、投与8週時の平均トラフ坐位収縮期血圧では上乗せの降圧効果を示した。投与8週時における平均トラフ坐位血圧のベースラインからの変化量を表2に示す<sup>9)</sup>。

表2 ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジド50mg/12.5mgで効果不十分な高血圧症患者を対象とした試験での平均トラフ坐位血圧のベースラインからの変化量<sup>†</sup>(mmHg)

		ベースラインの血圧 <sup>‡</sup>	投与8週時の変化量 <sup>†</sup>
ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジド50mg/12.5mg (N=144) <sup>§</sup>	収縮期	151.7 (9.5)	-6.2 (1.0)
	拡張期	95.9 (5.4)	-5.3 (0.7)
ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジド100mg/12.5mg (N=134) <sup>§</sup>	収縮期	152.4 (11.2)	-8.5 (1.0)
	拡張期	95.1 (4.5)	-5.0 (0.7)

<sup>†</sup> 最小二乗平均値(標準誤差)、<sup>‡</sup> 平均値(標準偏差)、<sup>§</sup> FAS解析対象例

また、ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジド100mg/12.5mgの降圧効果は、収縮期及び拡張期血圧共に52週時においても持続した<sup>9)</sup>。

二重盲検期(8週間)において、ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジド100mg/12.5mgが投与された患者で副作用が報告されたのは134例中7例(5.2%)であり、主な副作用は血中尿酸増加3例(2.2%)であった。延長期(52週間)において、ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジド100mg/12.5mgが投与された患者で副作用が報告されたのは265例中32例(12.1%)であり、主な副作用は血中尿酸増加7例(2.6%)、高尿酸血症4例(1.5%)、浮動性めまい、AST増加、BNP増加各3例(1.1%)であった<sup>9)</sup>。

## 18. 薬効薬理

### 18.1 作用機序

本剤の配合成分であるロサルタンカリウム(ロサルタン)は、経口投与後速やかに吸収され、その一部が主代謝物であるカルボン酸体に変換される。ロサルタン及びカルボン酸体は、いずれも生理的昇圧物質であるアンジオテンシンⅡ(AⅡ)が作用する受容体(AT1受容体)に極めて高い親和性を示し、AⅡの作用を選択的に拮抗することにより降圧効果を発揮する。ロサルタンは、レニン・アンジオテンシン系(RAS)が活性化されている高レニン性高血圧モデルにおいて著明な

降圧効果を示し<sup>10)</sup>、逆にRASの関与が少ない低レニン性高血圧モデルにおける降圧効果は弱いことが知られている<sup>11)</sup>。一方の配合成分であるヒドロクロロチアジドは、チアジド系の降圧利尿薬である。ヒドロクロロチアジドの降圧機序に関しては、尿管におけるナトリウム再吸収抑制作用による循環血液量減少作用が考えられている<sup>12)</sup>。また、ヒドロクロロチアジドはその利尿作用によりRASの活性化を起こす<sup>13)</sup>。したがって、本剤はRAS活性化状態で著明な降圧効果を示すロサルタンとRASを活性化させるヒドロクロロチアジドとの配合剤であるため、両成分の併用投与は各単剤投与と比較しより顕著な降圧効果を示すと考える。

### 18.2 降圧作用

自然発症高血圧ラットにおいて、単剤投与で中等度の降圧効果(約15mmHg低下)を示した用量のロサルタンと単剤投与では降圧効果が認められなかった用量のヒドロクロロチアジドを併用投与することにより、著明な降圧効果(約30mmHg低下)が認められた。併用投与群における降圧効果は各単剤投与群の効果と比較し有意であった<sup>14)</sup>。

## 19. 有効成分に関する理化学的知見

一般名: ロサルタンカリウム (Losartan Potassium)

化学名: Monopotassium 5-[[4'-(2-butyl-4-chloro-5-hydroxymethyl-1H-imidazol-1-yl)methyl]biphenyl-2-yl]-1H-tetrazol-1-ide

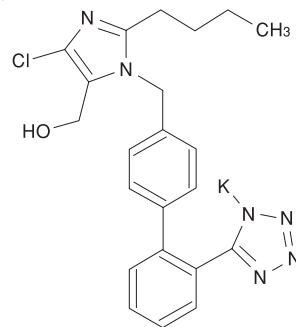
分子式: C<sub>22</sub>H<sub>22</sub>ClKN<sub>6</sub>O

分子量: 461.00

性状: 白色の結晶性の粉末である。

水に極めて溶けやすく、メタノール又はエタノール(99.5)に溶けやすい。

構造式:



一般名: ヒドロクロロチアジド (Hydrochlorothiazide)

化学名: 6-Chloro-3,4-dihydro-2H-1,2,4-benzothiazine-7-sulfonamide 1,1-dioxide

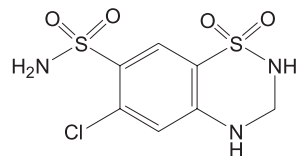
分子式: C<sub>7</sub>H<sub>8</sub>ClN<sub>3</sub>O<sub>4</sub>S<sub>2</sub>

分子量: 297.74

融点: 約267°C(分解)

性状: 白色の結晶又は結晶性の粉末で、においはなく、味はわずかに苦い。アセトンに溶けやすく、アセトニトリルにやや溶けにくく、水又はエタノール(95)に極めて溶けにくく、ジエチルエーテルにほとんど溶けない。水酸化ナトリウム試液に溶ける。

構造式:



## 22. 包装

〈プレミネント®配合錠LD〉

100錠 [10錠 (PTP) × 10]

〈プレミネント®配合錠HD〉

100錠 [10錠 (PTP) × 10]

## 23. 主要文献

- 1) 阿部真也、他. 周産期医学. 2017; 47: 1353-5.
- 2) 齊藤大祐、他. 鹿児島産科婦人科学会雑誌. 2021; 29: 49-54.
- 3) Rai A, et al. Am J Respir Crit Care Med. 2016; 193: A1890.
- 4) Jansson PS, et al. J Emerg Med. 2018; 55: 836-40.
- 5) Vadas P. Am J Emerg Med. 2020; 38: 1299.e1-2.
- 6) Kane SP, et al. Perfusion. 2018; 33: 320-2.
- 7) Pottegård A, et al. J Intern Med. 2017; 282: 322-31.
- 8) Pedersen SA, et al. J Am Acad Dermatol. 2018; 78: 673-81.
- 9) Rakugi H, et al. Hypertens Res. 2014; 37: 1042-9.
- 10) 岡田恵、他. 基礎と臨床. 1994; 28: 4063-73.
- 11) Wong PC, et al. J Pharmacol Exp Ther. 1990; 252: 726-32.
- 12) Shah S, et al. Am Heart J. 1978; 95: 611-8.
- 13) Lijnen P, et al. Br J Clin Pharmacol. 1981; 12: 387-92.
- 14) 社内資料: ロサルタンとヒドロクロロチアジド併用による降圧作用

## 24. 文献請求先及び問い合わせ先

オルガノン株式会社 カスタマーサポートセンター  
東京都港区南青山1-24-3  
フリーダイヤル 0120-095-213

26. 製造販売業者等

26.1 製造販売元

**オルガノン株式会社**

東京都港区南青山1-24-3

7007886404

© 2025 Organon group of companies. All rights reserved.